

令和6年度ドラマリーディングクラブ定期公演

橋 bridge ～つなぐ想いの断片～

脚本・構成・演出 清水司 (劇団 SOUTHERN COMFORT 代表 / 脚本・演出・俳優)

女1

男1 / 女1の高校時代の恋人

女2 / 男1の娘・高校生

女3 / 女1の母

女4 / 土地開発会社の調査員

女5 / 女1の娘・高校生

女6 / 女1の友人

客入れ

照明 暗転

映像、音楽の30秒くらいで、タイトル

照明、音楽T.O. ↓上手側ねらい（この間に女1、板付き）

女1

「ねえ、また会えるよね。」

3月の西日は冷たい。

あの人は、私の方を振り向き、ぎこちない笑顔を作った。

そして何も言わずに、軽く頷き、手を振って去っていった。

分かっていた。

笑顔は残酷である。

私の望む言葉なんて返ってこないくせに。

笑顔は残酷だ。

少しだけ、そう、少しだけ希望を抱かせる。

あの人は、次の日引越した。

都会の大学へ行くために。

3月だというのに、そこら中に雪が残っていて、春の気配は感じられない。

春の橋は冷たく、流れる川の冷気を吸収しているようだ。

その橋の上に立っていると、私までその冷気を吸収してしまいそうだった。

少し前まで繋いでいた、手だけが温かった。

私は、あの人の姿が見えなくなるまで、そこに立っていた。あの人の姿が見えなくなっても、まだ私の手は温かった。高校2年生の私の話だ。

私たちは、車で40分ほどの、地方都市の別々の高校に通っていた。週に何度か、帰りの車の時間を合わせ、一緒に帰った。

そして、私たちは、あの橋で別れの言葉を交わす。

5 mほどの、名前も知らない小さな橋。

もしそこに川が無くて、単なる一本道だったとしたら、私たちはどこで別れの言葉を交わしていたのだろうか。

私の家の前まで来てくれただろうか。

私は今もまだ、あの橋から50 m先にある家に住んでいる。

40年前は比較的新しかった家も、今はもう大分くたびれている。

何故私は、こんなことを考えているのだろうか。

理由は分かっている。

つい最近、友人から、あの人が、娘らしき女の子と歩いているのを見たという話を聞いた。

だからだ。

といっても、そのことだけを聞いただけで、他は何も知らないし、知りたいとも思わない。

どっちにしろ、私たちのお付き合いは終わっていただろう。

今はただ、あの頃繋いだ手の温かさを思い出しただけなのだ。

結局私は、あの橋を渡ることができなかった。

あの人を追いかけて、都会の大学にもいけなかったし、

その後、年相応で築くことができた結婚生活もうまくいかず、まだ小さな娘を連れて、またこの地に帰ってきたのだから。

あの橋を渡るには、私の背負う荷物は重すぎた。

いや、そう思っているのは、…いや、勝手にそう言い聞かせているのは、誰でもない、私なのだ。

それなのに、世の中は不都合なものだ。

今になって、強制的に橋を渡り、別な地に住まなければいけないというのだから。

そのことも、私をメルヘンな世界へ誘っているのかもしれない。

正直、私は戸惑っている。

母は喜ぶものだと思っていた。

地方の比較的都会と言えるところから嫁いできた母は、不便な田舎暮らしに、どこか窮屈さを感じていたように、私は思っていた。

父は10年前に亡くなっていたし、母がこの地に留まる理由は何もないはずなのに。

そこそこの保障をされながら、今よりは便利なところに引っ越すことができるのだ。

母は喜ぶものとばかり思っていた。

そんな母が浮かばない顔をするなんて、私は予想していなかった。

私の知らない、母だけの何かがあるのかもしれない。

年老いた母にとって、単純に新たな場所で暮らす不安を感じているだけかもしれない。

どちらにせよ、私は母のためにやれることは、何でもしたいと思う。

離婚に関わる様々なことに疲れ、娘を連れて戻った私を、父と母はあの橋で待っていてくれた。

どんな言葉を交わしたかは詳しくは思い出せないが、父は娘を抱っこし、母は私の鞆を手に取り、空いた方の手で私の手を握り、母と手を繋いで家に帰ったのだ。

その時決めたのだ、何があっても、父と母と娘と、ここで、みんなで、幸せになるんだと。

そのためなら何でもすると。

父は幸せだっただろうか。

今更知る由もないが、聞いたところで答える父じゃないことも知っている。

それならば、私が勝手に決めてやろう。

父は幸せだった。

残った母にも幸せでいて欲しいと心から思う。

母がこの地を離れたくないのであれば、私は闘おうと思う。

この火照った手を握りしめ、私は闘おうじゃないか。

ふと思った。

この手の温かさは、誰の手を思い出しているのだろうか。

誰の手でも良いではないか。

私の手に残る温かさの思い出は、どれも素敵で温かさなのだから。

明日、娘と手を繋ごう。

高校生の娘が好き好んで、私と手を繋ぐとは思えないが、無理やりにも手を繋いでやろう。

娘のぽかんとした顔が想像つくが、そんなことは気にしない。

伝えたいのだ。

私の手の熱を、ギュツと娘に伝えよう。

照明、上手ねらい out

照明、下手ねらい (ここに合わせて男1、板付き)

男1

今僕は、田舎のあの橋を思い出している。

形状も、長さもまるで違う、都会の大きな橋を歩いているのにも関わらずだ。

先ほどすれ違った、おっさんとその連れの女性が、私の田舎の方言を喋っていたこともあるし、

おっさんの連れの女性が、高校時代に付き合っていた、彼女の友達に似ていたような気がしたからだ。

たしか、程よく日焼けしていて、元気な子だったと記憶している。

ほとんど話したことはなかったが、私たちの前を、すごい勢いで走って帰っていく姿を覚えている。

今僕は、この都会の、そこそこ大きな橋を歩きながら、その頃のことを思い出している。

彼女が住んでいた家の近くにあった、小さな橋を思い出している。

学校帰りに一緒に帰り、他愛もない会話をして、その橋で別れる。

何度か家にも行ったことはあるが、大抵はそこで別れるのだ。

初めて彼女の家に行ったとき、家に入るよりも、その橋を渡る時の方が緊張したことを覚えている。

彼女はこうしているだろうか。

我ながら、下衆なおっさんだと思った。

そんなことを考えてもどうにもならないというのに。

それでも僕は、僕の想像を抑えることができないでいる。

彼女は、身長が低くて、色白で、少し耳が大きくて、可愛らしい子だった。

少し耳が大きくてと言ったが、僕はちょうど良い大きさだと思っていた。

彼女は気にしていたが、彼女の目と鼻と口にぴったりと合っていて、僕は彼女の耳が大好きだった。

今も彼女は耳を気にして、耳が隠れるような髪型をしているのだろうか。

10年以上前に帰省した時に、一度だけ参加した同窓会で、彼女の話聞いたことを思い出した。

地元の会社に就職をして、その会社の先輩と結婚したが、数年で離婚して、今は実家にいるという話だったと記憶している。

今もあの人に住んでいるのだろうか。

独身なのだろうか。

子どもはいるのだろうか。

：

つくづく自分はずまらない人間だ。

そんなことを考えたからと言って、何にもならないというのに。

そうだ。僕は昔から愚かな男であった。

僕がこっちの大学に受かり、引っ越す前の日だった。

彼女とのデート帰り、いつものように彼女を家に送り、あの橋で別れる時のことだ。

彼女は言ったのだ。

「ねえ、また会えるよね。」と。

僕は、…何も言わなかった。

僕は、自分の誠実さに自信がなかったのだ。

「ねえ、また会えるよね。」

「もちろん。」

「ねえ、また会えるよね。」

「今日が最後だと思う。」

どっちだって良いではないか。

さっきまでの下衆な想像はすっかり消え去り、僕はただ、無性に彼女に謝りたいと思った。

無言ほど残酷なものはないではないか。

そう。無言ほど残酷で無責任なことはないではないか。

僕は今、久しぶりに娘と歩いている。

休日の日課になっている散歩に、娘の方から、突然一緒に行きたいと言ってきたのである。

ある程度の頃から、世間一般的に起こり得るように、娘と僕の距離は遠くなっていた。娘は僕という空間に、嫌悪感に似た窮屈さを感じているようだし、そんな娘に対して、僕も罪悪感に似た窮屈さを感じていた。

おそらく、娘も僕も、その根本的な理由を理解することはないだろう。

想像していた以上に、寂しい気持ちはあったが、それも成長の証だと自分に言い聞かせてきた。

：

仕事優先で、家庭を省みない自分を見て見ぬ振りをしながら。

そんな折に、娘の方から、一緒に散歩に出かけたいという発言に、僕は驚きもしたが、嬉しさで舞い上がった。

この年のおっさんの舞い上がっている様は、娘にとっては、滑稽というより鬱陶しかつたに違いない。

上滑りした会話のあとに、沈黙が続いた。

何か話さなければと思ったが、頭に浮かぶのは、
学校はどうだ。

友達とはどんなこととして遊んでるんだ。

どんな音楽を聴いてるんだ。

将来、何かやりたいことはあるのか。

彼氏はいるのか。

そんなことしか思いつかない。

日常生活を普通に送っていけば、聞く必要のないことではないか。

それが、娘と僕の、今の距離感なのだと愕然としながら、無言の散歩が続いていた。

心地良いはずの、橋の上を吹く風が、僕に何かを叩きつけるかのような、強い向かい風に感じた。

実際に橋の上の風は、僕を叩きつけているのだ。

僕は、高校時代から何一つ変わらず愚かなままだと。

今日、娘は僕に何かを伝えようとしている。

娘は意を決して、行動を起こした。

僕はそれに応えなければならぬ。

娘が僕に何を伝えたいのかはわからない。

そんなのは当たり前だ。

そうやって今まで過ごしてきたのだから。

この橋を渡り終えれば、家はすぐそこだ。

急がなければならない。

田舎のあの小さな橋と、似ても似つかないこの橋の上で、僕は変わらなければならない。娘が伝えたいと思っていることを聞き、僕はそれに対して、誠実な言葉を返さなければならない。

僕は娘の方を振りむこう。

そして、こう言おう。

何か言いたいことがあるんじゃないか。

聞かせてくれないか。

橋の上を吹く風が、優しく僕を後押ししてくれた様な気がした。

照明、下手ねらい out

照明、上手ねらい (ここに合わせて女2、板付き)

女2

父は不審に思っているだろうか。

散歩に出かけると言った父に、急に私も一緒に行くと言い出したのだ。不審に思わないわけがない。

いや、久しぶりの親子水入らずを、心から楽しんでいるかもしれない。

父にはそういった、天然なところがある。

この橋を渡り終えれば、すぐ家だ。

早く言わなければいけない。

それにしても、たまにはこういった散歩も良いものだと思う。

季節もあるのだろうか、吹き抜ける風とは、まさにこう言ったものだろうかというように、清々しい。

父の散歩ルートも快適だ。

新しい気付きが嬉しい。

古びた看板。小さな畑。スポーツに励む小学生の声。

歩くスピードも良い。

早すぎず、遅過ぎず。

父が私の歩くスピードに合わせてくれているのだろうか。

それとも、単純に親子だからなのだろうか。

久々のデートに、よっぽど舞い上がっていたのか、最初はうざい位に話しかけてきたが、ようやく落ち着いたようで、今は普通だ。

しかし、散歩がここまで気持ちいいものだとは思わなかった。

これなら毎週一緒に歩きたいものだ。

しかし、父の一人の時間を邪魔しても申し訳ない。

できるだけ休日は、心身の休息に当てて欲しいし、父のペースで過ごして欲しい。

月に1回くらいなら良いんじゃないだろうか。

そんなことを考えているうちに、当初の目的を忘れそうになる。

1時間くらいは歩いただろうか。

この橋を渡り終えれば、もうすぐ家に着いてしまう。

早く話を切り出さなければいけない。

私は父を尊敬している。

父の仕事を素晴らしい仕事だと思っている。

確かに、そのせいで、なかなか家族の時間を作れないということもあるが、私は父の仕事に取り組む姿勢が嫌いではない。いや、むしろ好きだ。

私も父の様になりたいと思う。

バリバリ仕事をして、誰かのためになりたいと思う。

困っている人に、少しでも救いになれるような人になりたいと思う。

私なりに真剣に考えた。

真剣に考えたうえでの結論だ。

私はアメリカの高校に編入しようと思う。

私は父の様に、ラボでの仕事ではなく、フィールドでの仕事に就きたい思っている。

それには、英語圏での就学は早い方が良い。

私自体の覚悟はあるが、この年で親元を離れることに、父は戸惑うに違いない。

父はどんな顔をするだろうか。

父の歩くスピードが遅くなった。

ひよっとして、私の思っていることが伝わったのだろうか。

いや、違う。

何か考え事をしているようだ。

そう言えば、さっきすれ違ったおじさんとおばさんが、父の実家の方の言葉を使っていた。

あそこから歩くスピードが遅くなった様な気がする。

故郷を思い出しているのだろうか。

父の故郷は、素敵な所だ。

のどかで、自然の色んな音が聞こえて。自然の色んな匂いがある。

一度、一人で散歩に出かけたことがあった。

結構歩いた記憶がある。

どンドン山が近くなっていき、川の音が小動物のように跳ね回っているように聞こえた。嬉しくなり、どンドン歩いて行った。

しばらくしたら、小さな橋があって、橋の向こうにお婆ちゃんが立っていた。

今でも覚えてる。

橋のこちら側を何とも言えない目で見ていたのだ。

憎しみではない。

羨望でもない。

原始的な拒否感と言えば良いのだろうか。

あの頃の私は、おばあちゃんのその目に、なんだか分からない恐怖を感じたし、今でも、あのお婆ちゃんの目が何を語っていたのか、どんな感情だったのか、私には理解できない。

私は一瞬立ち止まったと思う。

お婆ちゃんは、私に気付いて、すぐに柔らかな笑顔になり、会釈をした。

私も会釈を返した。

会釈を返した後も、私が見たお婆ちゃんは、幻覚だったのではないかと思うくらいに、いつもそこにある柔らかな笑顔だった。

実際に、単なる私の見間違いかもしれない。

あのお婆ちゃんは、今もあそこにいるのだろうか。

お婆ちゃんと小さな橋との間には何があるのだろうか。

次の日、父と一緒にその場所に行ったはずだ。

父は、「こんなところまで一人で来たのか。」と驚いていた。

前日と同じ様に、橋まで行った。

お婆ちゃんはいなかった。

そこには柔らかく、穏やかな空気だけがあった。

あの時の父も、今と同じ様に、少しだけ歩くスピードが遅くなった様な気がする。

父とあの橋の間にも、何かがあったのだろうか。

まだ私は小さく、父は大きかった。

あの時、父がどんな顔をしていたのか気にはなるが、きっと、その顔は私には理解できないものだ。

あのお婆ちゃんも、父も、それぞれ自分だけのものに違いない。

それにしても、こんなに家の近くに来るまで話すことができないとは誤算だった。

どこか公園のような所で、ベンチに座って、水分補給がてら、ちよつとした休憩位はあるのかと想像していたが、ずっと歩きっぱなしだ。

まさか、こんな人が行き交う所で、しかも、家にごく近い橋の上まで引つ張るとは微塵も思わなかった。

まあ良い。

橋の上は、さっきまで歩いてきた道よりも、更に気持ちの良い風が吹いてるではないか。この橋の上で、足を止めて、川を見ながら、父に話そうと思う。

父はどんな顔をするだろうか。

あの時に比べて私は大きくなった。

しっかりと父の顔を覚えていようと思う。

今日、この橋の上での父の顔は、私と父のものだ。

照明、上手ねらい out

照明、下手ねらい (ここに合わせて女3、板付き)

女3

あの橋が嫌いだった。

知らない土地に嫁いできた私にとって、あの橋は境界線だった。

夫のことは好きだったし、夫の事情にも納得したうえで嫁いだのにも関わらず、私は、あの橋を渡りながら、気持ちを整え、ぎこちない笑顔を身に纏っていたように思う。皆優しかった。

義理の母も父も良い人で、理解もあった。

それでも仕事を終え、あの橋を渡って家に帰る時に、私は何かしらの覚悟を纏う。

おそらく、私は幸せな筈だった。

でも、私はあの橋が嫌いだった。

それなのに、

何故だろう。

あれほど嫌いだった橋を、いざ越えられるというのに、私はこの家に留まりたくなっていた。

何故だろう。

娘はいつから私のこんな気持ちを理解していたのだろう。

そんなこと一言も言ったことは無いはずなのに。

「お母さん、ここから出たかったんじゃないの。」と言われたときは驚いた。

「そんなこと思ったこともないよ。」と娘に言ったが、明らかな嘘をついた自分が恥ずかしくなり、私は川の水が気になるからと、外に出た。

2日前から降り続けている雨のせいで、川は増水していた。

普段はうっそうと生い茂っている草花たちが、川に飲み込まれたかのように見えない。いつそ私も飲み込まれてとも思う。

でも私がここに住んでから、川の水が橋を越えたことはないし、この小さな橋は、いつだって強固にあり続けていた。

川に飲み込まれたように見える草花たちもそうだ。

水が引けると、川の水に屈したかのようにしな垂れているが、数日経てば、そんなことあつたつけという様に、力強く立ち上がっている。

この地に長く生きて、いつの間にか私にも、この地に根付いたもの特有の力強さの様なものが備わったのかもしれない。

私は橋の上に立ち、私たちの家を見ていた。

ずいぶんくたびれたものだな。

私が嫁ぐにあたって建て直した家も、既に40年以上も経っていたのだ。

夫は、私を大事にしてくれた。

こんなこと夫の前では絶対に言えないが、あなたのもとに嫁ぐことができて、私は本当に幸せものでした。

義理の父と母もそうだ。

ふつつかな嫁だったと思う。

それでもいつも優しく、気にかけてくれて、笑顔を絶やさずについてくれて、私は本当に助かりました。

娘と孫も、本当に私のことを大切にしてくれる。

二人とも、いつの間にか大人になっていて、ずっと見守るつもりだったのに、いつの間にか、見守られる立場になってしまっていた。

川は、更に勢いを増していた。

今川に飲み込まれたとしても、私には何の後悔もない。

私は幸せ者だ。

気づいていた。

もうとっくの昔から、私はここが大好きになっていた。

ここで生まれた、全てのものを守りたいと思っていた。

いつの間にか、私は、私たちの家を見て、泣いていた。

いつから、なぜ、涙が零れていたのだろうか。

私は心の中で、「ありがとう」と何度も言っていた。

どれくらい、橋の上から家を見ていたのだろう。

娘と孫が、危ないから家に入ると迎えに来た。

なかなか家に戻らなかつただけだけでも、心配をかけていたのに、私のぐしゃぐしゃの顔が、更に娘たちを心配にさせてしまった。

次の日には、雨も一緒に上がっていた。

私はもう大丈夫だが、一つ気にかかることがあった。

この家から引越すにあたっての、説明にくる女の子だ。

私が庭仕事をしていて、あの女の子が橋を渡り、家に向かってくるときの表情が気になっっている。

土地の件は、基本的に娘に任せているので、娘とあの女の子の間で、どういったことが話されているのか、私はほとんど何も知らない。

娘が、あの女の子に理不尽な物言いをしているわけではない。

娘がそんな人間じゃないことは、誰より私が知っている。

娘から、あの女の子の悪い話も聞いたことがない。

何があの子の子を、あのような表情にさせているのだろうか。

前に、畑で穫れた野菜を、お土産に持たせた時の顔が忘れられない。

若くて可愛らしい女の子だ。

何にも負けない、眩しくらしい笑顔が良い。

娘が離婚を考えていた時期に、家に遊びにきていた時と似ている。

引っ越さなければいけないかもしれないと、娘から聞かされた後の私に似ている。

どうしなければいけないのか、分かっているはずなのに、分からないのだ。

自分の手足が、自分の手足じゃないような感覚。

自分の顔が、自分の顔じゃないような感覚。

自分の頭の中が、どこか違う所にあるような感覚。

あの女の子は、確かに野菜を見て、喜んでいた。

そう。確実に喜んでいたし、嬉しそうだった。

しかし、それと同時に対になる感情も佇ませていた。

対になる感情がどんなものなのかは、私にはわからない。

一度、話してみたいと思った。

こんな年寄りが、何をしてあげられるかはわからない。

いや、ほとんど何もしてあげられないだろう。

それでも、あの女の子と、私は話してみたいと思う。

私は、あの雨の中、橋の上でたくさんのことを話した。

夫と、義理の父と母と、娘と、孫と。

本当に話したわけではない。

でも私は、私の本当の気持ちを話したと思っている。

私に何ができるかはわからない。

ただ寄り添ってあげたい。

そう寄り添ってあげたいのだ。

私の周りにいる人が、少しでも幸せになれるように。

そんな年寄りがいたって良いではないか。

娘と孫には伝えなければいけない。

あの日以来、何かと私のことを心配しているが、きちんと伝えなければいけない。

「お婆ちゃんは、もう大丈夫だよ。」と。

照明、下手ねらい out

照明、上手ねらい (ここに合わせて女4、板付き)

女4

他人の故郷を奪いながら、私は生きている。

限界集落と呼ばれる地域。

限界だろうが何だろうが、そこで生活している人はいるはずなのに。

その人たちが限界だと言ったわけじゃないだろうに。

第3エネルギー。環境に優しいエネルギー。

聞こえは良いが、本当にそうなのだろうか。

その環境という領域の中に、そこにいる人たちは含まれていたのだろうか。

いったん壊して、構築する。

それが優しいということなのだろうか。

確かに、降って湧いた話に、喜び、その土地を捨てる人もいる。

逆に、不便なのは承知の上で、その土地を愛し続ける人もいる。

どちらも正しいと思う。

ただ単純に、様々な想いを埋め立てる仕事で、私は生きているのだ。

様々な生き物たちの呼吸を止めて、私は生きているのだ。

いつからこんな気持ちを持つようになったのだろう。

最初は、自分がしていることに大義のようなものすら持っていた。

でも最近はずう。

その橋を渡るとき、私は重い気持ちになる。

自分という人間を否定せざる得ない。

その橋が、流れる川が、好きなのだ。

どこの田舎にでもあるような、小さな橋が好きなのだ。

そして、その先に住む心優しい人たちが好きなのだ。

大概の土地に、もっともらしい理由はある。

同時に、そこに住み続ける理由だってあるのだ。

その地域は、地すべり危険区域に指定されていて、新たに家を建て直すこともできないし、いつまでもそこに居続ける危険性も理解できる。

おそらく、あの家の人たちは、私の説明に理解を示してくれて、近い将来、別な場所に
移り住むことになるだろう。

それで本当に良いのだろうか。

私のもやもやは消えない。

いや、むしろどんどん酷くなっている。

移り住んだ場所で、あのお婆ちゃんは、今と変わらない笑顔でいられるのだろうか。

：

私には故郷が無い。

父と母も都会の出で、私も都会に生まれ、都会で育った。

コンクリートと共に生きてきた。

何なら、私も、もはや半分はコンクリート化しているのではないだろうか。

限られた区域に、意図的に作られた自然と共に生きてきた。

全てが凝縮している。

固く。

冷たく。

優しさも、固く、冷たい。

：

疲れていたのだろう。

私は地方に移動になった。

そこにも、もっともらしい理由があった。

でも、そこは、…柔らかく、温かかった。

全てが。

モニター越しではない、自分の目で見えるものが、鮮やかで、眩しくてしようがない。

眩しくてしようがないのだ。

事業説明会。用地買収。

今までだって、やってきた仕事だ。

それがなんだ。

何で私の心は、こんなにもぐらついている。

きっと5年後の自分、いや、ひよっとしたら、既に来年の自分でさえ、きっと今まで通りコンクリートの様に仕事に向かっていくかもしれないというのに。

今なのだ。

なぜ今、私はこんなにもぐらついているのだ。

あの日、お婆ちゃんがくれた野菜。

自分の畑で穫れたんだって。食べてって。

そんなにいっぱい食べられるわけないじゃん。

私が野菜を落としそうになって、助けるお婆ちゃん。

手が触れた。

固くて、温かった。

体温が、かすつと上がった様な気がした。

私の中から、何かが噴き出していった。

私は早口にお礼を言い、逃げ出すようにその場を去った。

抑えられなかったのだ。

何が。

わからない。

自分でもわからない、何かを、抑えられなかった。

あの橋に差し掛かった時、涙が零れ落ちた。

ああ、抑えられなかったのは、これか。

そして、橋の真ん中で、野菜を抱えたまま、しゃがみ込み、私は泣いた。

秋が近づいているのだろう。

影が長かった。

その後も何度か足を運んだが、いつだって、柔らかくて、温かくて、私をぐらつかせた。

一度、帰り道の橋の上で、お孫さんと会った。

私は話してみたくなり、思いきって声をかけてみた。

お母さん似で、色白で可愛らしく、幼く見えたが、高校生だということだった。

私のことはどう聞いているのだろう。

どう思っているのだろう。

警戒感があった。

それで良い。

その方が、ずっと気が楽だ。

でもそれは、突然話しかけられて、当たり前のように、誰も抱く程度のもだった。少し話してわかった。

いや、最初から分かっていたはずだ。

その子の醸し出す、全てが柔らかく、温かかった。

馬鹿な質問をしたものだ。

「私って、どう見える。」

彼女は困っていた。

当たり前だ。大して知らない私を見てどう答えれば良いというのだ。

「都会的で、すっとしてて、格好良いと思います。」

そう。それが私だ。

照明、上手ねらい out

照明、下手ねらい (ニコに合わせて女5、板付き)

女5

不思議な質問をされた。

ここは好き？

馬鹿にされているのかと思った。

私の家を買おうとしている人だ。

正確に言えば、ここら一帯を買って、開発するのだから、その人が買う訳ではないのだが。

その人はいつも申し訳なさそうな顔をしている。

その日は、私は学校の帰りで、その人は私の家を訪ねて帰るところだった。

橋の上で、私たちは会った。

その人は、いつも通り申し訳なさそうな顔をしながら、とつぜん私に声をかけた。

型通りの会話を、軽くした後、その不思議な質問がきた。

ここは好き？

引越したくないよね。

何と答えれば良いのだろう。

何故私があなを励ますようなことをしなければならぬのだろう。

私は、私が3歳の時に母が離婚し、この地に帰ってきた。……らしい。

私にその当時の記憶があるはずがない。

要は、物心ついてからの記憶のほぼ全てがこの土地に関わっているのだ。

好きも嫌いもない。

比べるものがないのだから。

郷愁という言葉が、17歳の私に意味を成すわけがない。

「良いところだよね」

その人は橋の欄干にもたれ、川を見ていた。

その人が何を考えてるのかは、知る由もない。

その人の肩に、赤とんぼが止まった。

私は静かに手を伸ばし、とんぼを捕まえようとした。

寸前でとんぼは逃げた。

その人は私の動きに驚き、私はとんぼを捕まえようとしたのだと説明をした。

「そうなんだ。びっくりした。川に落とされるのかと思った。」と、その人は笑いながら

言った。

私もびっくりした。

こんなにも、眩しい笑顔ができるんだ。

その眩しい笑顔は、とても魅力的だった。

その人は私に言った。

こんな風に赤とんぼが普通に見られることってね、実はとっても幸せなことだと思うの。
カエルの鳴き声や、セミの声。

トンボは鳴かないけど、それら全てが普通に思える私が羨ましいというようなことを言っていた。

そうなのかもしれない。

でも今の私にはわからない。

この先、そういう様なことを理解できるようになるのが、良いことなのかどうかもわからない。

17年生きてきて、分かったことがある。

私がやれることは、それほど大きくない。

言い換えれば、小さなことしか、私にはできないのだ。

もちろん、「私」は「その人」にも該当する

その人も、もがいているんだろうなと思った。

だって、あんなに眩しい笑顔をするんだから。

もがいて、諦めて、もがいて、諦めて。

ごめんなさい。

私には、あなたを励ますような言葉は言えないと思う。

私にできる小さなことは、まだまだ本当に小さなものだから。

その日は、なかなか寝付けなかった。

あの人との会話のせいだ。

17歳の郷愁について思った。

17歳の郷愁、何とも安っぽい映画のタイトルみたいだ。

先日部屋にいた時、庭で、お母さんと隣のおばさんがしていた会話を思い出した。

隣のおばさんは、お母さんと同い年で、幼馴染らしい。

無駄に声が大きくて、私は苦手だ。

何でも、おばさんが旅行に行った先で、偶然にお母さんの昔の恋人を見たという話をしていた。

おばさんが知っている、昔の恋人だということは、お母さんが結婚する以前に、この地で生活していた頃だろうし、それは、私が知らない、お母さんの若い頃の話なのだろう。当たり前のことだが、お母さんには、思い出があるのだ。

この家に。

あの川に。

あの古びた橋に。

どんな彼氏だったのだろうか。

父には、何の興味も持てないのに、何故か、お母さんの高校時代の彼氏の話は、興味津々だった。

身長は。

部活は。

格好いいのか。

何故別れたのか。

その人のことを、お母さんはまだ好きなのだろうか。

ふと思った。

お母さんは引っ越したいのだろうか。

この地に留まりたいのだろうか。

いや、それ以前に、お母さんはここが好きなんだろうか。この家が好きなんだろうか。

：

私は彼氏を、この家に連れて来たいと思った。

ここで、この人たちと、私は生きてきたんだと言いたいと思った。

今のところ、そんな予定もないし、その頃にもうこの家はないかもしれない。

浅い眠りが続き、外が白んでいくのが分かった。

外で、お婆ちゃんが、なにやらガタガタと音を立てている。

おそらく畑にでも行くのだろうか。

普段はぐっすり寝ている時間なので、お婆ちゃんは、こんなにも早くから動き始めているのかと感心しながら、お婆ちゃんの立てる物音で、落ち着いたのか、私はそこから深い眠りに落ちた。

深い眠りに落ちながら思った。

最近、お婆ちゃんの様子が変だ。

何がどうってわけじゃないが、何か変な気がする。

きっとお母さんも気付いている。

外が静かになった。

お婆ちゃんは、出かけたらしい。

照明、下手ねらい out

照明、上手ねらい (ここに合わせて女6、板付き)

女6

あの人を見たのは、いつ以来だろうか。

飲み屋の馴染みのじじいに誘われて、大相撲を観に行って、たまたまあの人を見かけた。土地勘のない私には、そこがどこなのかも分からないし、もう一度そこに辿り着くこともできないだろう。

大きな川があり、大きな橋が架かっていて、その橋の上にあの人はいたのだ。

見た瞬間に分かった。

もう何十年も会ったことが無いというのに。

あの人は、私に気付いただろうか。

話しかけたかった。

でも、無様に年を取った私に、そんな勇氣はあるはずもなく、じじいとうでも良い話をしながら、通り過ぎた。

娘らしい女の子と、一緒に歩いていて。

友達感覚の仲の良い親子という感じではなかったが、別段、いがみ合ってるような親子でもなかった。

一緒に散歩している時点で仲が悪いはずもないだろう。

あの人が、普通に幸せそうなことを嬉しく思った。

まるで昔の彼氏のように、あの人と言っているが、私とあの人の間には何も無い。

私の隣に住む、私と同じ年の、色白で可愛らしい、彼女の高校時代の彼氏だ。

彼女とは、中学時代までは、よく登下校を共にしていたが、高校は別の高校だったので、自ずとそういった機会は減り、帰りの汽車で一緒になった時に、共に帰る位になってい

った。

その内に、彼女は一個上のあの人と付き合うことになり、私と彼女が一緒に帰る機会はますますと減っていった。

そして、帰りの汽車に、あの人と彼女が乗っていたときは、何故か変な気を遣い、すぐに下車して、彼女たちに見つからないように、ダッシュで先に帰っていた。

あの人と彼女は、決まってあの橋のところで別れる。

先に家に着いた私が、たまたま部屋で着替えをしている時に、窓の向こうにそれを見つけたのだ。

それからは、汽車と一緒に帰った時は、毎回ダッシュで家に帰り、部屋の窓から、二人を見るようになっていた。

手を振り合い、あの人が見えなくなるまで、あの人の背中を追い、それから振り向いて彼女は家に向かう。

色鮮やかな季節も、真っ白な冬の日も。

まるで彼女が季節に彩りを与えているようだった。

私はそんな彩りとは関係なく、薄暗い、2階の自分の部屋の窓から、ただ二人をこっそ

り見ていたのだった。

羨ましかった。

もしあそこに立っているのが私だったら。

きっと私が季節に彩りを与えていたことだろう。

∴

そんなことはない。

ある筈がない。

∴

あの人の大学進学を機に、あの人と彼女のお付き合いは終わりを迎えた。

それは同時に、私の秘かな恋も終わった瞬間でもあった。

その後私は、年相応に新たに好きな人ができ、年相応に結婚もし、平穩という言葉しか

思いつかない様な日々を生きている。

私は必死にそうしたのだった。

私は、あそこから逃げ出したかった。

あの橋を見たくなかった。

橋を見る度に、二人を思い出したし、同時に、私の家の、2階のあの部屋の窓の側に立つ、自分が見えるからだ。

私もあの人のことが好きなんだと、彼女に言えていれば、こんな気持ちにはならなかったのかもしれない。

私はまだ、たまに実家に帰るときも、意図的に橋をぼんやりと視界にとらえてるし、無意識でいようとしている。

私は彼女に、彼を見たことを伝えた。

飲み屋の馴染みの爺さんに誘われた、大相撲観戦の時とは言えず、単に旅行の際に、彼を見たと言っていた。

彼女の反応は普通だった。

それはそうだ。

もう何十年前の話だ。

当たり障りのない会話がなされた。

元気そうだった。

どんな年の取り方をした。

娘さんは何歳くらい。

それなりに盛り上がったが、彼女は、彼に対して、それほど興味を示しているようには見えなかった。

彼の話を引きつけに、昔話に花が咲いた。

私たちは、楽しくなっていた。

ただ普通に、子どももの頃のように、楽しくなっていたのだ。

思えば、いつ以来だろう。こんな風に話したのは。

一通り盛り上がり、話が落ち着いた際に、彼女が私に言った。

「いろいろ気を遣わせて、ごめんね。」と。

何のことかと思った。

彼女は知っていたのだ。

彼と彼女と一緒に帰る時、私が見つからないように、ダッシュで家に帰っていたことを。駅で二人を見かけた時は、汽車の時間をずらしていたことを。

知っていながら、私に甘えていたことを謝ったのだ。

さらに彼女は、私に対する感謝の言葉を続けた。

大したことじゃない。

勉強を教えてくれたこと。部活で色々支えてくれたこと。

確かに、私の方が彼女より、勉強もできたし、部活も私がレギュラーで、彼女は補欠だった。

でも私は、彼女が、そんな風に私のことを思っていたなんて、微塵も考えたことがなかった。

分かっていた。

彼と付き合っていた彼女を、羨ましかったんじゃない。

色白な肌を、可愛い素振りを、周囲に彩りを与える彼女を、私はただ単に、妬んでいただけなのだ。

帰り道、私はしっかりと橋を見た。

そこには、彼に向かって手を振っている彼女だけじゃなく、幼い私と彼女も遊んでいたし、部活で負けて、泣きながら帰る私と彼女もいた。

色んな私と彼女がいた。

私は思った。

彼女が彩りを与えても良いではないか。
私もその一部で良いではないか。

照明、下手ねらい out

以下の台詞は、袖で

女1 ねえ、日曜、なんか予定ある。

女5 え、特にない。

女1 デートしようか。

女5 何で。何でお母さんとデートしなきゃいけないの。

女1 他に相手いないでしょ。

女5 まあ、いないけど。

女1 じゃあ、良いじゃん。

女5 いや、そういう問題じゃないでしょ

女1 手繋いでさ。

スイーツ食べてさ。

女5 手繋ぎながら、スイーツ食べてるは、気持ち悪いでしょ。

女1 そこはさすがに、手放すよ。

女5 何、どうしたの。

女1 そんな気分なの。

気合い入れようと思って

女5 気合い入れるときは、デートするの。

女1 そう。

女5 気合いはデート前に入れるものじゃないの。

女1 若いな。

女5 何それ。

女1 大人は気合を入れるためにデートするの。

女5 はあ。

女1 そうだ。お婆ちゃんも誘おう。

女5 3人でデートするの。

女1 そう。

女5 まあ、良いけど。

女1 あなたが真ん中ね。

女5 何が。

女1 お母さん、あなた、お婆ちゃんの並び。

女5 それ、親に連れられてる、小さな子供じゃん。

女1 私たちから見たら、いつまでたっても小さな子どもだから。

女5 年の話じゃなくて、身長の話だから。

女1 はいはい。

女5 何流してんの。

女1 とにかく、日曜、みんなでデートね。

女5 はい。

女1 どこ行こうかな。

入れ替え

女2 お父さん。

男1 何。

女2 …

男1 どうした。

良いぞ、何でも言え。

女2 …お父さん、私ね、アメリカに留学しようと思うの。

男1 え。

女2 駄目。

男1 いや、駄目も何も。

え、だって、お前、まだ高校生だぞ。

女2 うん。早い方が良いと思って。

男1 いや、早い方が良いって、

女2 私ね、将来、医療系の仕事に就きたいと思ってるの。

しかも、フィールドの。

男1 フィールド。

女2 色んな国の困っている人たちを助けたいと思ってる。

男1 うん。

女2 だから、少しでも早いうちに、英語圏の国で勉強したいと思うの。

男1 お母さんは。

女2 知ってる。結構前から、いろいろ相談に乗ってもらってる。

男1 そうなのか。

女2 駄目かな。

男1 駄目も何も、突然すぎて、処理が追い付いていない。

女2 まあ、そりゃそうだよね。

とりあえず、私は伝えたから、お父さんは冷静に、私の言ったことを考えてください。

男1 わかった。

女2 ふう、緊張した。

男 1 俺も緊張したよ。

急に一緒に散歩行くって。

俺はてっきり、子どもでもできたのかと思ってたよ。

女 2 は。何それ。

男 1 いや、だから、お前に子どもができたのかと思ったんだよ。

女 2 聞こえてる。

何それ。気持ち悪っ。

私のこと、どんな風に見てんの。

男 1 いや、

女 2 信じらんない。先帰るから。

男 1 待て待て待て。

女 2 いえ、待ちません。

男 1 ちよっと待てって。

入れ替え

女4 お婆ちゃん。

この前は、野菜、ありがとうございます。

女3 多かったですよ。

女4 まあ。一人だとさすがに。

でも、大丈夫です。冷凍したりとか。

女3 貰ってくれてありがとうございます。

女4 いえいえ、こちらこそ。

女3 穫れるときは、一気に穫れるから。

うちらも、困ってたんだよ。

女4 いやいや、私の方こそ助かりました。

野菜の味、濃いですよね。

女3 そう？

女4 絶対濃いですよ。

スーパーで買うのと全然違います。

女3 形はいびつだけどね。

女4 料理すれば、形は関係ないですから。

素材の味は重要です。

あ、私、こっぴど見えて料理得意なんです。

学生の頃、近所の町中華で、…食堂でアルバイトしてたんで。

女3 そう。

女4 はい。

女3 良かった。

女4 はい。本当に美味しかったです。

女3 いやいや、少し顔色が良くなった。

女4 私、顔色悪かったですか。

女3 悪かったね。

いや、日焼けしただけかな。

女4 え、やだ。嘘。毎日日焼け止め塗ってんのに。

女3 多少、焼けた方が、健康的で良い女に見えるよ。

女4 嫌ですよ。私若いんですから。

女3 年寄りを前に、そんなこと言うか。

女4 あゝ、ごめんなさい。

女3 嘘嘘。あ、そうだ。今日の朝穫ってきた、ナス持って行けばいい。

女4 良いんですか。ナス大好きです。

女3 今、持ってくるから。

女4 ありがとうございます。

入れ替え

女1 今度の日曜ね、娘とお母さんと3人でデートするの。

女6 良いね。

女1 でしょ。

女6 あ、それ何か羨ましい。

女1 お母さんも、結構乗り気です。

女6 女3人つてのが良いなあ。

今さら、旦那とデートつてのも嫌だしな。

女1 え、やっぱりそんなもんなの。

女6 うん、旦那と二人は、きついかな。

女1 その辺は、私分らないからな。

女6 かと言って、息子とデートつてのもね。

女1 それは良いんじゃないの。

女6 駄目でしょ。腹減ったって行って、ラーメン屋かどっか行って、大飯食らって終わりですよ。

女1 お母さんだ。

女6 そう、食べ盛りの息子連れてる、単なる母親。

雰囲気も何もあつたもんじゃない。

女1 確かに。

女6 私も娘欲しかったな。

女1 娘良いよ。

最近、ちょっと生意気だけど。

女 6 　　なんで、あの位の年って、生意気なんだろう。

腹立つよね。

女 1 　　腹立つ。

ま、でも、私たちもそうだったんだろうけどね。

女 6 　　そうね。

女 1 　　ねえ、今度さ、二人でデートしない。

女 6 　　良いねえ。

女 1 　　何か、いつも立ち話じゃない。

たまには、お洒落な店でさ、

女 6 　　甘いもの食べて、

女 1 　　そうそう。

女 6 　　なんなら、その日は、そのまま食事したりなんかして、

女 1 　　飲もう。

女 6 　　がんがん飲む。

女1 良いねえ。

女6 私たちが一番雰囲気ないから。

女1 本当だ。

女6 よし、絶対行こう。

女1 うん。絶対行こう。

音楽、ボリューム上がり、C.O.

照明、舞台を横切る道の様に

両袖から、女1を除く、他リーディング生とサザカンのキャストがゆっくりと歩いて登場 ↓ 舞台を通り過ぎる

サザカンキャストは上下の立ち位置に留まる（向かい合って立っている）

女1、袖からの台詞

照明、サザカンキャストを後ろから

女1

お久しぶりです。

元気にしてますか？

久々のあなたの名前を聞いて、懐かしく思い、こうやって筆を執っています。

手紙を書くなんて、何十年ぶりでしょうか。

というより、こうやって真剣に手紙を書くことと思ったのは、人生で初かもかもしれません。

難しいものですね。書きたいことは山ほどあって、ぐるぐると頭の中を巡っているのに、

いざ書くこうと思うと、それらが一気に迫ってきて、上手く言葉になりません。

突然、このような手紙を書かれても、ただただ迷惑だと思えますが、安心してください。

この手紙をあなたに送ることはありません。だって、あなたがどこで、何をしているのか、私は全く知らないのですから。

ただ、今回起きたことで、混乱している私がしようと思ったことが、手紙を書くこうということだったのです。

誰に対して手紙を書けばいいのか、私は悩みました。

だって、こんな手紙をもらっても、どうしていいのか分からないに決まっています。

そんな時、あなたのことを思い出しました。

先日、友人から、旅先であなたを見かけたという話を聞いて、ちようどいいと思ったのです。

思い出に手紙を書く。

それがちようどいいと思えたのです。

ということで、勝手にあなたを登場させてしまっでごめんなさい。

まあ、今のあなたにも、これからのあなたにも、何の関係もないことなので、黙って聞いて、笑顔で許してください。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、今、私が何に混乱しているのか。

こつやって手紙を書くこつと思ったのか。

…

母が、亡くなりました。

突然でした。そう、本当に突然のことで、葬儀を終えた今も、どこかふわりとして、何の実感も持てないのです。

いつもは朝の早い母が、その日は7時になっても起きてこず、どうしたんだろうと思っ

て、母の寝室に行くと、母は布団の中で、静かに、ただ静かに亡くなっていたのです。穏やかな顔をしていました。

よく死んだら仏になると言いますが、ああ、これが仏というものなのかという穏やかな顔でした。

私は、生涯、あの、母の顔を忘れることはないでしょう。

そこから先は、よく覚えていません。

今、身体が鉛のように重く感じているので、相当にバタバタと無理をしてたのでしょう。たくさんの人が、母を悼んで泣いてくれました。

不純かもしれませんが、嬉しかったです。

それは、単純に母がたくさんの人に愛されていたという証ですから。

驚いたのは、この地区の開発に関わる、うちの土地買収の担当の若い女の子が、まるで自分の母が死んだかのように、泣きじゃくっていたことです。

一体、いつの間に母は、あの子とそんなに仲良くなっていたんだろう。

まあ、母はそんな人でした。

娘は、…そう、母が亡くなる少し前に、母と娘と3人でデートをしたのです。

普段はそれほど外に出たがらない母でしたが、その日はやけに乗り気で、3人で甘いものを食べたり、それぞれの服を選んだりと、他愛もなく楽しい一日を過ごしたんです。3人の最後の思い出としては、上出来過ぎると思いませんか。

娘は、その日3人で選んだ服を、葬儀の間、ずっと着ていました。

参列した人は、やけにカラフルな喪服に、不謹慎だと思ったかもしれませんが、頑なにその服を着て、母を送ってやるんだと言った娘を、私は誇りに思います。

きっと、母もそう思っていることでしょう。

葬儀を終えて、私は、母の遺灰の一部を、庭に撒きました。

生前に母とそんな話をしたことはありませんでしたが、母はこの家にずっといたそうでしたし、私もここに母がいると思いたかったからかもしれません。

メガソーラー発電所の設置ということで、ここら一帯は、開発されることになりました。時の流れです。母も私も、仕方がないことだと分かっています。

しかし、やはり生まれ育った場所がなくなるということは、どこか消化しきれない部分があります。

母の本音は、ここに留まりたいんだと、私は思っています。

その少しばかりの抵抗が、今回の突然の死なのかもしれません。

どんなに元の風景と違うことになるかと、母をこの地と一緒にしてあげたいと思いました。

あの橋も、大型車が通れるように、取り壊され、大きな橋に変わるようです。

私たちにとっての、思い出の橋が、無くなります。

あなただけじゃない。父、母、娘、色んな人たちとの思い出が詰まっています。

寂しく思います。

あなたも寂しく思ってくれるでしょうか。

…長々と書き綴り、いったい何のための手紙だったのか、私は、何を言いたかったのか分からなくなってきました。

迷惑な話ですね。

そうだ。あなたが最後に私を家に送ってくれた時に、私があなたに言ったことを覚えていますか？

あなたは曖昧な笑顔で答えてくれなかったけど。

まあ、こつやってあなたを思い浮かべながら手紙を書いているのだから、また会えたと

いうことなのかな。

たまにはノスタルジックも良いものですね。

サザカンキャスト 羽生が手を振り、玉置がそれに応えて手を振り退場

これから先、まだまだ大変なことは起こるでしょう。

そんな時、私はこの地に足を運び、おそらく既にないであろう、橋の下に来るでしょう。

そして、かつてあった家を想うでしょう。かつてあった美しく優しい思い出を想うでしょう。

そして、言うんです。

「ねえ、また会えるよね。」

女3
もちろん。

音楽、井上陽水 「最後のニュース」 (album: Blue Selection)

照明、暗転

了